バハオラについて話して下さい

ホセイン・ダネシュ

今日はバハオラについて思い当たる事を話したいと思います。もっとも、これはバハイに興味ある方からの「バハオラについて話して下さい」という質問への回答であります。

１８５２年にある素晴らしいお方が精神的および物質的発展における新時代を宣言されました。そして人類の発展が始まった訳です。更にこの方は彼御自身がこの新時代の創始者であると宣言されたのです。この様な出来事は歴史上でもとても珍しいものです。歴史上記録に残っている中でも、人類における新時代を始められた人はそう多くはありません。アブラハム、モーゼ、仏陀、クリシュナ、ゾロアスター、キリスト、モハメッドそしてバブという方だけが、１８５２年に世界中に新時代の到来を宣言されたこの方と比肩されるだけです。我々の知るところでは、これらの方々だけが世界の主要な宗教の創始者であります。彼らは歴史上に於いて、意識と文明に新たな革新をもたらしたのです。人類に新しい考え、関連性と新しい話し合いを伝えたのです。彼らの教えの結果として、全く新しい人生が展開し、人生の目的そのものが変化しました。普通、彼らは使者または預言者と呼ばれました。使者とは、創造主、偉大なる精神、人類と万物の生成者で、我々が神、または他の名で呼ぶ存在からのメッセージをもたらすものです。基本的にこれらの人物は自らを使者と呼び万物の存在の源からメッセージを授かっていると言っております。彼らは（神の代理としての）預言者らと人間との間の聖約を確立し、メッセージを伝える為に順々に現れたのです。従って、キリストも仏陀もモハメッドも預言者であり、聖なるメッセージを人類に伝えたのです。この方々は人類が一体となる時、人類が再び統合される時、統一が訪れる時そして平和が訪れる時に予言がかなう日が来る事を伝えるべく現れた預言者でもありました。全ての預言者はその時が来ることを語っています。またどの預言者も自身が予言の実現をもたらすものではないと主張しています。それは将来起こることであると伝えています。いろんな言い方がされていますが、本質的には各預言者の時代は、夜の時期であり、その日は未だ来ていないとか子供の時期のようであり来るべき時代は未だ先の事であるとのように言い表していました。

つまり長い歴史の中で人類は待ち続けていた訳です。人類が心から熱望しているものがあります。人類の魂は統一の日、予言が実現される日、平和が訪れる日、喜びの日、至福の日を待望し続けてきたのです。詩、神話、物語、音楽やあらゆる神秘的書簡においての人類の探究であり、人類はその時、その時期、その時代を待ち望み続けてきたのです。

その時は１８５２年の夏に始まりました。場所は遙か彼方のペルシャのテヘランの暗黒の地でした。それ以上に象徴的で離れた所はないという所を神は選ばれたのです。その時に起きたもう一つの特徴的な出来事があります。過去において使者および預言者と呼ばれていたのが、この時初めてその方は神の顕示者として呼ばれたのです。顕示者とは使者や預言者とは違う性質を持っています。というのも顕示とは顕現し意味を明らかにするからです。顕示は知られざるものを知られるものとし、隠されたものを明らかにする訳です。物事の意味を明らかにする、顕示するそして暗闇から引き出すという事が顕示の力で行われます。

そこで、１８５２年の夏、暗黒の地でこの人物が現れるのです。彼の名はバハオラと言います。バハオラの名はバハとアラの二つから成り立っています。バハにはいくつかの意味が

ありますが、最も特徴的なのが光と栄光です。ここでは光というバハの名について話してみたいと思います。つまりバハオラは世界の光であり、世界を明るくし、過去の神秘に光をあて、過去の期待を実現される方です。光は暗黒の地Ｓｉｙａｈ－Ｃｈａｌ（シア・チャル）から立ち上がり、人類の魂を包み込んでしまうのでした。この光は太陽の光のように非常にゆっくりと昇るのでした。もし、それが急に現れたなら、人々は眩しさに目を閉じ、光に背を向け、身を避けてしまうでしょう。そこで、光はとてもゆっくりとやって来るのです。最初の光は暗黒の闇からちらちらと輝き、それを見たものは少なかった。更にこの光は１１年にわたって世に知られずにいた。この光が来た事を知る人は殆どいなかった。夜明けには２つの段階があるように（朝のうちの早い時期に一度明るくなりかけ再び暗くなりやがて明るくなって２度目の夜明けが来る）、精神的・物質的世界でも同じ事が起こっていた。バハオラは最初、暗黒の闇から光り輝き、バグダッドとスレイマニエでの年は人知れず暗闇に閉ざされた時であり、バハオラの人生で最も暗い時期であった。そして１８６３年にバハオラは、今こそ予言が実現される時代であることを公に宣言された。今は予言が実現される時代である。その時、バハオラが何であるのか、何故現れたのかを宣言したことは驚くべき出来事でした。これは俳句における季節、時候との関連性に似たところがあります。暗い時や日が短い時、我々は春が来るのを待ち、我々の魂は春を待ち望んでいるのであり、これはちょうどその時の人類の状態そのままであり、バハオラは１８６３年に春の到来を人類に伝えたのです。バハオラはこう語った。「王国の春は来た。おお最も高貴なペンよ。慈悲深きものの祝祭は素早く近づきつつある。あらゆるものの創造主の前で、奮起せよ。そして神の名を賛美せよ。全ての創造物が甦り、新しくなることを知り彼を賞賛せよ。言葉あげよ。なんじ沈黙するなかれ。」
（落穂集27-28）

新しい時代、人類に対する神の啓示の時は始まったばかりです。やがてバハの太陽はバハオラがアドリアノープルで投獄されていた時に偉大な輝きをもって立ち上がります。その地でバハオラは世界中の君主と統治者へ向けて自分の存在と課せられた使命を宣言した一連の書簡を送ったのです。そしてついにバハオラがアッカで苛酷な牢獄に閉ざされている時にその光は最高に光り輝いたのです。世界がこの光を隠そうとしている中で驚くべき力強さで、この光は隠そうとする努力をものともせず、最初は暗黒の地での暗い牢獄で、次はイラク・バグダットへの追放、辺境の地アドリアノープルでの牢獄で、そして最も恐るべきアッカの牢獄で、人類がこの光を見ないようにあらゆる手段をつくしているときにおいてもなお、この光の性質は光り輝くのでした。

バハオラを光としてたとえる時、それは彼が多くの人に知られるようになったというだけでなく、むしろ人類の意識に光明をもたらしたという意味でとらえています。彼は我々が誰であり何者であるのかという事に新しいレベルの意識と理解をもたらしました。これが最も大事な事です。神の顕示者について話をするとき、我々は人類の発展の歴史の中での定期的刺激、人類の意識のレベルを更に促進させた刺激について話しているのです。歴史的にみれば１０万年以前には人類は精神的なもので満たされていたという証拠があるのです。今の人間の頭脳は２５万年前に現れたことを忘れてはいけません。つまり我々が知っている形で人間の意識が表現するようになったのは２５万年前で、言葉と話す能力については４万年前からです。しかし人類が話す事ができた前にも、人間は生と死と埋葬が重大な関心事だったよ

うです。人類学や考古学の論文にはその証拠が出ています。しかし預言者や使者として人類の意識を発展させる役割はまた別のものです。今日の私の話ではこの時代にバハオラが何を行ったのかについてのみ触れてみたいと思います。

最初の話題は、バハオラが光明を与えたのは人類の発展だという事です。彼は人類は段階的に意識のパラメーターに沿って進化すると言われました。これは累進的啓示と呼ばれています。この累進的啓示という考えはユニークなものです。数多く存在する宗教のジレンマを解決する宗教はユニークなものです。数多く存在する宗教のジレンマを解決し宗教は科学のように一つである事を示し、宗教的真理は科学的真理の如く累進的で絶対的なものではない事、そして宗教を信じる人の主たる性質というのは偏見のない事であり、真に宗教を信じる人は真理を探究する人の事である、という考えです。宗教を信じる人は迷信、偏見を受け入れず、真理と共に新しい考え、または概念を進んで受け入れる人の事です。これは宗教を語る上で注目すべき革新的な見方といえます。今日の世界の現状では人類は宗教を否定しているのです。というのも今日の宗教はその研究手法は非科学的であり、論理的でなく、分裂を招き、迷信を深め、人間の心の発展を阻害するだけだからです。人々を結びつけるのではなく分裂させるこういう宗教や宗教的考えはバハオラによれば、ない方が良いのです。この種の迷信的で統一性を欠く宗教を人類が否定している訳で、人々にはそうするだけの権利があります。バハオラの啓示は、宗教的真理は一つであり、人類の累進的発展にあります。

バハオラは人間の性質についても明らかにしています。今日の世界での基本的問題の一つに、正しく人間の性質を定義することがあります。人間については、基本的に三つの考えがあります。人間は動物である、人間は機械である、というものと、人間は罪深く性悪なものであるというものです。もし人間が動物であるという説を信じるならば、動物のような人生を送らなくてはならない。実際にはそれが今の現状でもあり、人間の居住環境はジャングルになってしまった。ニューヨーク、デリー、ヨハネスブルグや他の多くの都市に行けば、そこに動物的生活のジャングルを見れるでしょう。

もし人間が機械だという説を信じるならば、機械的生活を送ることになり、自然・美・柔軟性・成長のない人生となります。今、東京やロサンゼルスやロンドンに行けば、そこでは人間の動物的かつ機械的光景の組み合わせを見ることができるでしょう。

人間が性悪である、本質的に悪いものである、という考えは広く信じられています。キリスト教、ヒンズー教、仏教、ユダヤ教などの社会では、自分自身または他人をまたは普通はその両方を罪深い者として考えている人がいます。つまり、直接または間接的に人類全体が罪深いものと認めている訳です。誰も逃げられません。しかもこの間違った考えを支持している科学的説もあるくらいです。フロイドは人間は二つの本能、性的なものと攻撃的なものを生まれ持っていると言いました。これはまさしく今の社会が行っていることではないでしょうか。マルクスは人間社会は闘争の上に成立していると言いました。生きることは階級間の闘争なのです。それ故マルクス主義者は、権力闘争を特徴とする社会を打ち立てました。権力を持つものが、誰であっても強く統制しなくてはなりません。統制が弱まると全てがバラバラになってしまうからです。

歴史はこの過程を証明しています。

そこでバハオラが現れ、人間は本質的に精神的であると述べました。また人間の精神的本質の核心には三つの知力や能力があるとも言っています。バハオラはこの三つの性質や能力

が人間を動物・機械または罪深い生き物と異ならせる点であると言っています。その三つのうちの一つは選ぶ能力です。従って、罪深くあるか否か、機械か否か、動物か否かというのは全て基本的に選択の問題です。しかしながら、彼は人生の目的は自分の存在を高めることにあると言っています。我々はこの三つの能力を深めることに注意を集中すべきで、そうすれば我々の知識を真理の探究に、愛を和合のために、そして正義をもたらすために意志を使うことができます。バハオラは人生の目的は神を知り、崇拝することにあると言っています。崇拝には愛と奉仕の二つの性質があります。とすれば真理や和合や奉仕は人生の果実と言うべきでしょう。これが新世界秩序の倫理または精神といえます。

バハオラが人間社会の発展過程についても新しい考えを打ち出しています。人間社会の発展と方向性には、目的と方向と論理があると述べています。もしその論理を理解できれば、今何が起きているのか、何故そうなのか、そして我々に何が出来るのかを理解することができます。基本的には人類全体は個人と同じように同じ発展の過程を辿っており、今や成熟期に近づきつつあるとバハオラは述べています。今日の世界の問題は人生の中の思春期の問題と似ています。

バハオラが新しくもたらした何百という考えの中から三つだけを選んで話をしてきました。バハが光という事、そしてバハオラが行った事は実在の現実性に光を投げかけたことを覚えておいて下さい。我々がバハイですという時、我々が光の源に結びついて意識が広がり、ものを見る力が何百万倍も大きくなることを意味します。新たな光で現実が見え、新しい手法で光に近づくことが出来るのです。それだけでなく、以前は見えなかった新しい現実が見えてくるのです。これがバハオラの名の一つの側面ですがバハオラにはもっと多くの名前があります。バハオラには数百の称号があります。もしそれについて話をするならば数百時間が必要でしょう。